

# 北信濃の秋 動植物をたずねて

① 増田今雄



雨の後、羽を広げるゴマシジミの雄=8月22日撮影

さまざまな動物がすみ、植物が育つ信州。希少な種類や、絶滅が心配されたり、増え続けたりしている生き物は少なくあり

ません。保護の動きも盛んです。写真記者の増田今雄さんが、北信地方の現場に足を運び、季節ごとに紹介します。

県版レッドリストで絶滅危惧1B類にランクされる本州中部亜種のチョウ、ゴマシジミ。

かつては県内各地で見られたが、環境の変化や乱獲で激減。現在、生息地は北信と中信地方に限られる。そんなゴマシジミを保護、回復させようという活動が広がっている。

北信の生息地は善光寺盆地の標高800mほどの里山の開けた場所。毎年、草刈りが行われ、幼虫が食べるワレモコウが辛うじて残されてきたこの場所だけが生息地だ。2005年あ

たりから徐々に数が減り、14年に確認できなかったのは数匹になった。保護活動は、危機感を持ったチョウの研究者が、県や市を通じて土地管理者にワレモコウの維持を訴えたことが始まり。除草時期を変えたり、群生地看板を立てたり、採集を防ぐパトロールなどが行われ、ゴマシジミの個体は維持されてきた。今季は、これまでの研究者や土地管理者に

「今年から観察、保護活動に携わる日本鱗翅学会評議員の田下昌志さん(55)＝長野市＝は「今季は最大で14匹が確認でき、増える傾向だ」と、期待を寄せる。

地元自治協議会などが加わり、活動している。地元の中学校美術部に絵を描いてもらい、「がんばれ！ゴマシジミ」の紙芝居を作って小学校に21日に贈る。ゴマシジミの説明や採集禁止の新しい看板を設け、立ち入り禁止のロープも張った。地元住民全体で「希少な命」を見守る意気込みが伝わってくる。

当初から観察、保護活動に携わる日本鱗翅学会評議員の田下昌志さん(55)＝長野市＝は「今年から観察、保護活動に携わる日本鱗翅学会評議員の田下昌志さん(55)＝長野市＝は「今年から観察、保護活動に携わる日本鱗翅学会評議員の田下昌志さん(55)＝長野市＝は

## ゴマシジミ

## 活発な地元保護活動

【ますだ・いまお】 長野市。1949年、松本市生まれ。信濃毎日新聞社編集局写真部長、編集委員などを務めた。1985年、写真企画「新しなの動植物記」で日本新聞協会賞を受賞

# 北信濃の秋 動植物をたずねて

②

増田今雄



松の樹上で、餌渡しをするチゴハヤブサの親(左)とひな。長野市南部の神社で8月20日撮影

春先、東南アジアなどから渡ってきたチゴハヤブサが、南へ帰る時季を迎えた。北海道や東北地方北部で繁殖し、長野県が南限とされる渡り鳥だ。主な飛来地は北信地方で、長野市で1994年に初

めて繁殖が確認されて以来、一帯で毎年記録されている。

県版レッドリストでは、2015年に「留意種」から「絶滅危惧1B」へランクアップ。個体数が少ないという理由だ。

日本野鳥の会長野支部長の小林富夫さんによると、今季はチゴハヤブサに異変が相次いだ。6月ごろに長野市消防局の鉄塔で営巣を始めたが、中断。8月には、同市平林の中部電力変電所に若鳥が迷い込んだり、南部の神社や南堀の住宅地など

ではけがをした若鳥を保護したりしたという。今年初めて営巣した同市南部の神社。8月下旬にひなが巣立ち、境内にある高さ20メートルの松の樹上で餌を受け渡しする親子の姿が見られた。

連日、県内外の鳥愛好家、カメラマンが集まり、望遠レンズがずらり。動きがあるごとに、シャッター音が連続してうなる。警戒する親が時折、周辺を猛スピードで旋回を繰り返す。来季も姿を見せにくれるか心配になる。チゴハヤブサは、ハ

トほどの大きさで、営巣場所は市街地の社寺など。まれに自分でも作るが、主にカラスなどの古巣を利用することが多い。08年に取材した寺では、営巣前、ケヤキの樹上にあるカラスの巣を巡って壮絶な戦いの末、乗っ取りに成功。3羽のひなを育て南に帰った。

同支部は、中曽根のスパイラルの森で9月16日(土)、23日(土)に、信州新町の小花見池で17日(日)に「タカの渡り観察会」を行う。毎年、数羽のチゴハヤブサも見られるという。

## チゴハヤブサ

## 異変が目立った今季